

## 第196回山梨大学医学会例会

日時：令和4年9月28日（水）午後4時10分～5時10分

会場：管理棟3階大会議室

### 教授就任講演

## 呼吸器診療の変遷と今後の展開

副島 研造

山梨大学医学部呼吸器内科学

司会 平田 修司教授

### 【要旨】

呼吸器疾患は肺癌，呼吸器感染症，喘息，COPDや間質性肺炎など多岐に渡り，腫瘍学，感染症学やアレルギー・免疫学に関わる疾患群を有し，急性から慢性疾患まで幅広い領域をカバーしている。また2019年にWHOが公表した世界での死因統計におけるトップ10の疾患のうち，3位をCOPD，4位を下気道感染/肺炎，6位を肺癌が占めており，生命に関わる主要な疾患群が含まれている。

これらの呼吸器疾患の中でも，喘息では免疫分子学的な病態解明の進歩に基づき，抗IgE抗体，抗IL-5/IL-5受容体 $\alpha$ 抗体，抗IL-4/IL-13受容体抗体が開発され，重症難治性喘息の治療成績向上に繋がっており，今後さらに抗TSLP抗体などの開発も進んでいる。

一方，最も治療薬の進歩が著しかったのは肺癌の領域であり，この20年間で進行非小細胞肺癌の予後は飛躍的に改善してきている。特にEGFR遺伝子変異やALK融合遺伝子をはじめとした，様々なドライバー癌遺伝子の発見とそれらの遺伝子変異に対応した分子標的治療薬の目覚ましい開発により，何らかのドライバー癌遺伝子変異を有する進行非小細胞肺癌の全生存は2000年当時の約1年から3年を超えるまでに改善している。さらに抗PD-1/PD-L1抗体に代表される免疫チェックポイント阻害剤の開発により，上記のドライバー癌遺伝子変異を有さない症例においても，約2年の全生存が得られるようになってきている。

今後の肺癌治療に関しては，遺伝子異常の有無に基づいたより精密な治療法（precision medicine）の開発が進む一方，ADC（Antibody-drug conjugate）製剤や免疫細胞治療の開発も進められており，遺伝子異常の有無や組織型によらない，より普遍的な治療法の開発も進んでおり，これまで難治性疾患の代表であった肺癌における治療成績はさらに改善していくことが期待される。